

蘇芳集

四万六千日

青山

丈

悼中谷信子さん七月十日逝く
信子さんの四万六千日なりき

どれも百円その中の浮いてこい
黒揚羽来るぶつからぬやうにする
パンダ見にパンダお休み心太
箱庭に手を入れてゐる背中かな
タオルなど首に垂らすと盆が来る
堤防に鯊釣りのゐる敗戦日

草 笛

下平直子

下闇や苔むすままの標石
鳥翔ちし葉擦れしばらく木下闇
下闇やこつんこつんと杖の音
家内を田の風通ふ更衣
茹でこぼす菜の青臭き走り梅雨
隠沼の何かきらりと半夏生草
草笛や元気かとまた兄が聞く

箱 庭

富田正吉

これだけといふには薔薇の多過ぎる
浅草はよく来るところ荷風の忌
腕まくりして昼顔を見にゆけり
箱庭の中箱庭の雨が降る
傘持つてゆけと云はるる桜桃忌
ちよつとしたおやつで父の日が終る
老人が老人を呼ぶ百日紅

浮いて来い

野路 斉子

ふだん着

前田 陶代子

落ちこぼれならず森より蟬こぼれ
ちちははも兄も居ぬ世の日雷
湯のやうな水道の水浮いて来い
寢食を共に文鳥かたつむり
若きらの大皿盛りの夏料理
赤チンを塗つて癒らぬ傷に秋
秋の日の雀確かなすずめ色

沖繩 忌

別府

優

梅雨の雷

峰岸 よし子

柏餅食べてゐる間も葉の乾き
思ふほど預金下ろせず灸花
靴脱いで下駄を揃へる桜桃忌
太宰忌の鳥ごゑ太く過りけり
浮草に平らな日差し沖繩忌
紫蘇もんで何時か素直になつてをり
充足の足拭いてゐる茄子の花

あかときの草の色して蟬生まれ
月の夜の銀色の毘つむぐ蜘蛛
煮くづれしものに舌焼く芒種かな
河骨の鈴の音雨を呼びにけり
ためらはず今朝の色剪る濃あぢさゐ
さくらんぼ盛りて白磁をよるこばす
忌の母の小言ほどなる梅雨の雷

夏落葉

宮尾直美

峠より峠が見えて椎の花
霞切の遙かに啼いて二日月
雨雲の沖へ流るる棕櫚の花
葬の夜の音なほ軽き夏落葉
関所跡過ぎて山路やほととぎす
梅雨に入る皿一枚で足る昼餉
抽斗の軽き湿りや額の花

梔子

八木下末黒

立葵年々ちぢむ背丈かな
黒雲迅し若竹のそよぎけり
梅雨晴や句会がありて町歩き
六月の並木吹かるるナポリタン
梔子そなふ弟の忌なりけり
子規庵の根岸二丁目梅雨明くる
少年の手足大きく竹煮草

蓮咲いて

吉田幸敏

何事のなき日はあらず蓮咲いて(福中倉子さん七句)
蓮見んと約せしこともまた夢か
面輪 顕つ 三 溪園 の 紅蓮
約束の油団の話できぬまま
なき人の返事のメール浮いてこい
水換へて人逝きし夜の水中花
神隠し土用藤とて残さるる

水引草

小川美知子

弁当屋に弁当揃ふ立あふひ
時の日を北へ北へと歩きけり
下闇や息がととのふ迄座る
寸暇惜しめばあぢさゐの青きかな
すぐ 乾く 大皿 二枚 夏の 月
終はつたこと終はらせたことメロン切る
水引草よりも静かに人が来る